



2014年1月29日放送

印象に残る症例①

関西医科大学 産婦人科 漢方外来担当 **梶本 めぐみ**

みなさん、こんにちは。私は関西医科大学の産婦人科で漢方外来を担当しています。大学の中の漢方外来なので、産婦人科の一般外来では治療できない、治療しても効果がない患者さんが紹介されてきます。やはり多いのは月経困難症や更年期障害の患者さんですが、中には「お下がすごく痛むんです」と言われる年配の女性もいらっしゃいます。

女性にとって内診と呼ばれる診察は精神的にも肉体的にも苦痛を伴うもので、還暦をこえた私の母も「あの屈辱的な恰好で内診台に登るのが嫌だから子宮癌検診は受けないの」と言いはっています。ご年配の女性にとって、それを覚悟してまで産婦人科に受診に来られるということは外陰部の痛みが痛くて、痛くて、たまらないからだと思います。それなのに、「外陰部も子宮も卵巣も異常ないよ。だから治療の必要はないよ。」と言われたらどうでしょうか。それで安心して帰宅される方もおられますが、中には「じゃあ、この痛みはなんなのか。このまま我慢するしかないのか」とますます不安が募る患者さんもおられます。私の勤務する産婦人科では「困った時の漢方外来」と称して、そんな患者さんが漢方外来へ紹介されてきます。

今回はそんな外陰部の痛みを訴える二人の患者さんについてお話しようと思います。一人目は気うつを伴った症例、もう一人は瘀血と腎虚がみられた症例で、2回に分けてご紹介したいと思います。

最初は「気うつを伴った外陰部痛」の症例から始めます。

症例は73歳の痩せ型の女性です。現病歴ですが近医産婦人科にて卵巣腫瘍を指摘され当院へ紹介。初診時に悪性の卵巣腫瘍の可能性があるかと診断され、初診からわずか3週間後に開腹手術となりました。その手術から3週間後に病理検査の結果が本人へ説明され、粘液性嚢胞性腫瘍（境界悪性）と診断されました。良性ではありませんでしたが、手術で腫瘍の塊を完全に切り取ったこと、さらに腹膜浸潤もないことから、再発の可能性は低いと判断され、術後の化学療法は行わず定期的な外来管理となりました。

また術後の全身状態もお腹の傷の状態も経過良好であり、患者さんにとっても主治医にとっても、喜ばしい経過でした。しかし術後1カ月を経過した頃から、いろいろな体調不良が始まりました。それは夜眠れないといった不眠や、傷の痛みやかゆみ、おりものが臭う、などいろいろで、それらを訴える度に主治医は睡眠薬を処方したり、創部に塗る軟膏を処方したり、膣炎の治療をしたり、果ては皮膚科へ紹介してステロイドの局所注射をしたりと治療を試みますが、なかなか治りません。その間も術後の傷の痛みは内腿、および外陰部の違和感へと、場所と症状を移しながら、ずっと患者さんを苦しめました。そして手術から約2年を経過した頃、左外陰部痛を訴えられ、漢方外来へ紹介されることになったのでした。

話はかわりますが、漢方外来に初めてこられた患者さんは、たいてい少し緊張されています。ある患者さんは漢方外来に紹介された時「漢方専門外来にいる先生は、きっと痩せぎすの白いひげを生やした怖いおじいさんに違いない」と思っていたと教えてくれました。一般の人の中の漢方薬のイメージは未だに山奥に住む仙人が使う薬のようなんだな、と知りびっくりしたことがありました。私はまだ40歳前の女性なので、それが功を奏すこともあります。この患者さんも、漢方の担当医師が女性であったことから「私の痛みを理解してくれるかもしれない」と思ったと後で教えてくださいました。

話はもどりますが、初診時の問診でこの患者さんに生活全般についていろいろ質問しました。すると、本人の手術の1年くらい前から夫が糖尿病とわかり、それからずっと食事管理にとっても神経を使っていること、さらに不眠症で夜眠れない日が続く、心身ともに疲労がたまっているにもかかわらず、昼寝などして体を休めることが全くできていないことがわかりました。ご年配の女性によくありますが、昼寝をするなんて怠け者のすることだとか、夫や周りの人に気兼ねして昼寝ができないとおっしゃる方がおられます。でもある程度年齢を重ねた体は夜間頻尿などもあり夜間に十分な睡眠をとれなくなる方が多くいらっしゃいます。そのため、お昼間に少しでも体を横たえて休むというのは必要なことではないかいつも思うのです。それでこの患者さんにも、お昼寝の効用についてくどいほど説明し、無理にでも昼間に横になるように指導いたしました。

次に腹部の診察を行いました。まず心下痞鞭と呼ばれる心窩部の抵抗がありました。また通称ヒステリー球と呼ばれる咽頭狭窄感があり、どちらも不安が強くなる場合に身体症状として現れるサインです。漢方医学的には気うつと呼ばれ、いわゆる気持ちが沈んでいくせいでいろいろな体の症状が起こる状態をさします。

どうやらこの患者さんの不調は不安が募っているのが原因ではないかと考え、問診を取り直しました。すると2年前の卵巣の手術についてぼつぼつと質問が出てきます。術後の病理検査結果で境界悪性といわれたが、それは悪性とどう違うのか、術後の抗癌剤はしなくても大丈夫なのか、もし再発したらどんな症状が起こるのか、など今まで聞きたくても聞けなかった気になることを、少しずつですが聞いてくださるようになりました。そこでひとつずつ質問に答えることにしました。境界悪性といっても、早期の手術により腫瘍がまるごと全部取りきれていることで、再発のリスクが低いこと、だからこそ術後の抗癌剤治療がいらぬこと、卵巣癌は再発してもすぐには痛みがないから外来受診を頻回にしていることなどをくわしく説明しました。そして最後に「早期の段階で治療ができたのは、早めに手術を受けたというあなたの判断がよかったんですよ！」と申し上げたところ「そうだったんですか・・・私はてっきりこんな病気になったのは私が悪いんだとばかり思っていました。これでよかったんですね」と自分自身をやっと許すことができたような、ほっとした様子を見せられました。

以上の診察後、半夏厚朴湯エキス顆粒、1日7.5g 2週間分を処方いたしました。すると2週間後ニコニコしながら来院され、あれほど気になっていた外陰部痛がなくなり、とても気分が良いとおっしゃいます。さらに2週間後受診された時「胃が痛くなったので半夏厚朴湯を1週間内服しなかったが、外陰部痛はまったくなくなった。」と言われました。

この症例では本当に半夏厚朴湯がよく効きました。この症例の外陰部痛は骨盤内手術による神経障害性疼痛から始まりましたが、手術の後、卵巣腫瘍が良性ではなかったことで不安が増大し、心因性疼痛へ移行したと考えます。そこで理気剤である半夏厚朴湯が効果を示したと考えます。それに加え、肉体的な疲れもとるべく昼寝を積極的にとるようにしたことで、気うつ自体が軽快。それにより、最後は半夏厚朴湯を内服しなくても痛みが消失していったと考えました。この症例は私にとって漢方薬の力を実感する印象深い症例のひとつになりました。次回は同じ外陰部痛でも、瘀血と腎虚によって起こった症例をご紹介します。